



透

過

す

る

視

点

乾久子展

2020.10.24(土) ~ 11.8(日)

■アクセス■

- ・東武伊勢崎線足利市駅徒歩 12 分・JR 両毛線足利駅徒歩 8 分
- ・北関東自動車道足利 IC より 15 分 (駐車場 3 台あり)

- 11:00~18:00 (最終日は 16:00 まで)
- 月・火曜休廊 (月・火が祝日の場合は営業し、翌日休)

- 軽食とソフトドリンクもお楽しみいただけます。



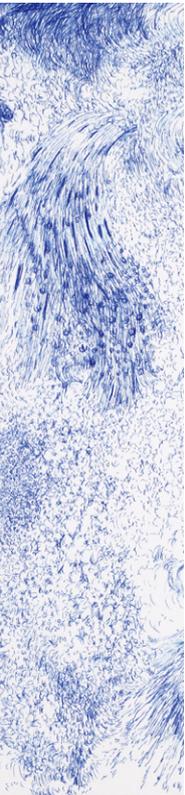
artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通 2 丁目 2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>

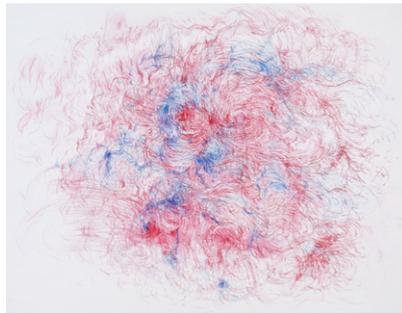


「人は自分の身体の中に内臓を持っていることを自覚している。しかしおそらくもうひとつの見えない内臓を身体の外に持っている。それは薄い被膜のようなもので丸く自分の身体を包み込んでいる。」こんな文章を以前、はじまりの美術館（福島県）の展覧会評で書きました。眼を開けると、自分の周りの世界が見えます。上下、左右へ首を回せば、自らが作り出す丸い映像に自分は取り囲まれているのだということに気がきます。そこに見える世界とはいったい何なのか。見えているのは、ものから跳ね返された光の反射であって、ものそのものではありません。その映像はあくまでこの世界の擬似的な把握に過ぎないのです。

乾久子の作品に触れたとき、「自分の身体を包み込む丸い被膜」と書いたことを思い出しました。彼女の描く繊細で温かさと冷たさを併せ持つこの幾多の線が、まるで丸い被膜に張り巡らされた神経細胞のように見えたのです。人は自分を包む丸い被膜の外の世界をうまく把握することができません。被膜の外に広がるおそらくより確かな世界を感覚することができないのです。

彼女は無意識にこれらの線を描いているのかも知れません。彼女自身、自分が何を描いているのか理解していないかも知れません。しかしだからこそ、これらの線（張り巡らされた神経細胞）がこの被膜をうまく通過し、向こう側の世界に触れる可能性を持っているのではないかと思うのです。

造形家・artspace & café 代表 岩本圭司



■アーティストトーク■

乾久子 × さとう陽子
『絵のことば、間の話』
11月7日（土） 15:00より
※要予約 定員 20名（無料）

●さとう陽子

美術家
1958年東京に生まれる。日大芸術学部卒。
絵画、写真、詩、パフォーマンス等を通して
世界との向き合い方を問い続けている。



乾久子 Hisako Inui

1958年 静岡県に生まれる。東京学芸大学大学院修士課程修了。
1990年代後半から浜松を拠点に作家としての表現活動始める。国内外での個展グループ展多数。心身から線を生み出すドローイングを制作の基本としているが、言葉の素描、ブックアートなど、表現の素材、方法は多岐にわたる。ことばと絵で美術と社会をつなぐ『くじびぎドローイングワークショップ』を全国各地で展開している。

●公式サイト

「乾久子の仕事」 <http://hisakoinui.com>

「くじびぎドローイングのすべて」 <http://kujidoro.net>



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通2丁目 2658
Tel : 0284-82-9172
E-Mail : info@artspace-and-cafe.com
URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>

